

健康万歳 ⑨

「がん」は生活習慣病

以前は脳卒中中、心筋梗塞、がんの3大疾患死亡率が順に上位3位を占めたが、長寿のせいでは「がん」死亡が一番高く30%以上までに至った。

がんは60兆もある人間の正常細胞中、1つの細胞が突然変異を来したことから始まる。細胞の大きさが違ったり、核の変異や不揃いがあったり、特別にがん細胞として始めから生じたものではない。またがん細胞が毒素を出すこともなく、稀には消えてなくなることさえもある。

人の免疫力（病気に対する抵抗力）が弱まった時に「がん」細胞が勢力を強める。これには間違った食生活、喫煙歴、過度の飲酒癖、ストレス

など永年の生活習慣が大きな誘因となっている。

がんは罹れば進行は極めて早く、手遅れになると体のあちらこちらに転移をして、最後に激痛を伴う死病である。皆がそう思っているが、がんには「治るがん」「治らないがん」の二つがあるようだ。「治るがん」は多臓器に転移がなく早期にがんを発見出来れば完全に治る確率は高い。

既に他に転移のあるがんは「治らないがん」で、他所へ転移している可能性が強く手術しても良くならず、場合によってはがん細胞を廻りにばら撒いたり、後遺症を発症したりで良くない結果が待っている。死亡した時に解剖してみれば

ば正常な人でも半数ががんにかかっているらしく、この計算からすると6人に1人はがんに罹ってもがん死ではないし、天寿を全うした《老衰死》だとしてよく聞く話だ。

抗がん剤は極めて強い毒性を持つっており、がん細胞を叩くが、同時に正常細胞だってかなりのダメージを受けることになる。頭髪が抜けたり、強い全身倦怠感を訴えたり、強い副作用に悩まされるのはそのせいだ。また免疫力を弱めることにもなりかねない。がん細胞の進行は思ったより遅く、相当年数を経過している場合もあり、逆に転移部が先に見つかることもある。永年の生活習慣とがん細胞の転移が最後の決め手となる。「知らぬが仏」と言うこともある。

林 榮一（医師・立花町）



楽しい絵手紙



八女市馬場 原口 和子

花が大好きです。我が家の花壇に花を育て、花を挿す事は私の生活の一部になっています。先輩会員の叔母の家で絵手紙を見た時、迷わず入会しました。四年前の事です。月一回のお稽古はとても楽しく、同じ物を描いていても出来映えは様々です。大坪先生はそれぞれの個性を大切に、優しく手解きしてくださいます。先生の御指導は、花はより美しく、野菜や果物は新鮮でより美味しく、まるで命を吹き込まれた様に絵が仕上がります。花を育て活ける喜びとともに、今絵手紙を描く喜びを感じながら感謝の日々を送っております。

矢部川物語スライドショー

私たち立花町郷土史部では矢部川について調べたり、見学したりしていますが、このほどその一部をスライドにしました。各地で試写会（黒木町本分、八女市津の江、立花町境原）をしたところ、皆様に好評をいただきました。構成は①矢部川は暴れん坊②矢部川の不思議③矢部川の恵みです。矢部川に関心を持ち、愛護する心を育てる上でも、もっと広く皆様に公開したらというご意見も頂いています。試写会のご希望があれば下記へお申し出ください。（所要時間は約35分です）



連絡先
八女市立花町谷川 286
電話 0943-37-0209 平島 格

遊園地ウオッチング

梅雨の中休みを狙って遊園地へ。ゲートをくぐるや孫たちは一斉に目当ての遊具へ走る。女たちはそこかしこにあるお店の誘惑に負けて右に行ったり左に行ったりして一向に先に進まない。

孫にも女房にも相手にさねず、一人取り残された爺は、お昼の弁当と水筒などの重量物を持たされて、イベント広場の前のベンチにとりあえず腰をおろす。

手入れされた芝生が広がり頭上には樹木が繁り、ひんやりと風が通って意外と心地よい。しばらくすると人込みにも慣れて、目の前を通り過ぎる人々を観察する余裕が出てきた。

先ず目に入ったのは手を繋いだ二人連れ。若者も熟年も睦まじいのは見ていて気持ちがいい。俺にもこんな時があったはずだよなあ。アニメやコミック誌のキャラクターになり切った衣装の若い女の子。日本は平和だなあ。

突然某国と思われる一団が来た。体も大きいが声も大きい。我が国だけではなく近隣の弱小国に對するやりたい放題な行動を、連日ニュースで見せつけられているだけに熱烈歓迎する気にはなれない。

傍若無人、言語道断、傲岸不遜、私の頭にはこの位しか思い浮かばないが彼の国にはかかる四字熟語はないのか。30年前前我々日本人も海外旅行先ではそう見られていたことだろう。そういう小さな頃頃体がでかくて弱い者いじめする悪タレがいたなあ。

フードコートで食事するのはバリバリのキャリア風母親と女の子、広場でお弁当を食べているのは人のよさそうなお父さんと男の子。きつと大事な仕事があつて両親揃つてのお出かけが出来なかつたのだろう。商魂たぐましい遊園地は帰りのゲート近くで最後の仕掛けをして子どもたちを待ちうける。

大当たりの鐘と大音響のマイクで呼び込みをかける子どもたちが吸い寄せられる。親の言うことを聞いて素直に立ち去る子、どうしても買うといつて聞かない子、親が手を引くのに足を踏んばって抵抗する子、根負けして財布を出す親、置いていかれても地べたに寝転んで泣き叫ぶ子、ついに切れて突然叩き出す親……。さとうちの孫はどのタイプだろうか……。家での縁が問われる一幕である。

現在の出生率でいくと2040年には896の市町村が消滅するという試算が発表された。この日見たファミリィは二人、三人の子ども連れも結構多く、おなかの大きいお母さんの姿もかなり見かけた。この試算外れといいのになあ。

梅雨明けも近づきいよいよ暑さが本格的になる頃だったが、自然豊かな遊園地で親子が歓声を上げて戯れる幸せな姿を前に、何の罪もない子どもを巻き込んだ悲惨な事件が近年なぜこも多いいのだからかと悲しい気持ちになった。

「子どもは国の宝」。地域の人間みんな子どもたちを守り育てるといつての日本らしい社会の仕組みを見直す必要があるのではと痛感した。平和な遊園地で現代社会の縮図を見た一日だった。

（追記）爺婆、父母、孫三代がこの日一番興奮して盛り上がったのは、ジェットコースターでも大観覧車でもなく、遊園地名物「あひるの競走」でした。（はるお）

眩き 向日葵

二十六年ぶりに奈良の町を訪れた。ボロボロになつてはいたがアパートは当時のまま残っていた。アパートの窓から見える風景も変わらない。田畑が広がっている。ここからの夕陽がきれいだったつけ。

このアパートを発つ日、「ほな、元気でな」と、最後の電話をくれた友達。その友達が二十六年ぶりにこの場所に連れてきてくれたのだ。

あの頃の私に出会った。まだ学生だった私は将来どうなるのか、何があるのか、未知の世界が待っている。怖いもの知らずで無鉄砲だったあの頃の私。今はすっかり大人で何もかも知った風だけれど、心から笑うことはめったにない。こんな私を誰が想像しただろう。

あの頃の私が、「こうやって消えずに残っているから、今を頑張れ」と、言うのが聞こえた。すると、ふと隣に立つ友人が「志穂なら大丈夫や」そうつぶやいた。

懐かしい思い出が、今の私の背中を押す。前へ進めますように……。わきには一本の向日葵が夏の空に向かって咲いていた。

森 志穂